

# 多様性がもたらすイノベーションと万博

日本科学未来館館長／IBMフェロー  
2025年日本国際博覧会協会副会長

浅川智恵子  
あさかわ ちえこ



## 未来を体験することで 科学技術の社会実装を加速する

私は、2021年4月に東京・お台場にある日本科学未来館の2代目館長に就任した。それに先駆けて公開した抱負では、「日本科学未来館を、新しい科学技術を体験していただける実験場にできればと願っています」と表明した。未来を体験することで科学技術の社会実装を加速する、そして、それが障害者、高齢者、子ども、外国人、そして全ての人が生きやすいインクルーシブな社会をつくることにつながる。これは私の信念でもある。その時には全く意識していなかったのだが、

実はこれは万博の設立当初からの理念でもあるそうだ。1876年、アレクサンダー・グラハム・ベルは聴覚障害者のための支援技術の研究の中から電話を発明した。その偉大な発明のお披露目の場となったのが、同じ年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会だった。ベル氏のデモンストラーションは国際的な注目を集め、電話の普及に向けた大きな一歩になったといわれている。

それから約150年、2025年の大阪・関西万博で求められているのは「未来社会」の姿だ。私達の社会はこの数年、大規模災害、様々な分断、人口構成の根本的変化、そしてパンデミックといった1つの技術では解決できな

い課題、そして私達の社会の姿そのものを変えていかなければ解決できない課題に直面し続けている。ベル氏の時代と異なり、1つの特別な技術が社会を変えることができる状況ではない。都市とそこに暮らす人々、その両者を科学技術が総体としてどのように未来へ導くことができるのか、155haの敷地に多くのパビリオンが立ち並び、2820万人(協会想定)が来場する、2025年の大阪・関西万博に求められているのは、まさにそうした意味での「未来社会の実験場」に他ならない。

## 日本の閉塞感を打破するためには

1970年の大阪万博は日本の高度成長期



視覚障害者の自立移動を支援する「AIスーツケース」。  
社会実装を目指し実証実験を進めている（協力：AIスーツケース  
コンソーシアム）。

に実施され、動く歩道、モノレール、電気自動車、携帯電話など、今につながる数多くの近未来の製品やサービスが登場し、普及の足掛かりを築いた。まさに日本が世界のイノベーションを牽引する時代の幕開けを彩るイベントとなった。

そこから50年、日本はいち早くイノベーションの社会実装を進める国であると胸を張れる状況ではなくなっている。公共の場所での画像認識技術の利用に関して、プライバシーへの漠然とした不安から調整に時間がかかる

のが常だ。安全性も乗り越えなければいけない壁の1つだ。たとえユーザーが自己責任において新たな技術を利用するとしても、万が一事故が起きた時に誰が責任を取るのか、そういう議論が延々と行われるのは日本でよく見る光景である。規制改革が進まず、法律や仕組みが新たな技術や製品に対応できずに社会実装の大きな壁となつて立ちほだかることも常態化している。こうした閉塞感を打ち破るためには、人々がもう一度イノベーションの価値とそれが実現する未来社会への希望を取り戻す必要がある。社会を構成するのは建物や交通手段などモノだけではない。そこで暮らす人々が初めて社会として成立する。重要なのは単に科学技術を展示することではない。参加者が未来の社会を体験することで、その中で暮らす自分や家族の姿を、実感を持つて想像できるようにすることが、そうした「希望」につながる。

### 誰もが参加できる万博は イノベーションの滑走路

大阪・関西万博では、人々を助ける科学技術とそれにより助けられる人々の姿にじかに触れられるようにすることで初めて、未来社会の実験場としての役割を果たせるはずだ。例えば、経路をいつも慎重に選ぶ必要がある

る車いす利用者や視覚障害者のための道案内システムも、都市の中にあらかじめインフラとして埋め込んでおけば、安定した精度の高いシステムが実現可能なはずである。こうしたインフラは、高齢者やベビーカーの利用者にとつても大変役立つだろう。さらには、自動走行車いす、ナビゲーションロボット、各種パーソナルモビリティ、そしてドローンなどのロボット技術を中心とした新たな技術を実証実験するうえでも役に立つはずである。社会に存在する多様なニーズに応えることが、社会の形を大きく変えるイノベーションにつながる例は、枚挙にいとまがない。誰もが参加することができる万博というのは単にソーシャルグッド、つまり社会に対して良いインパクトをもたらすためだけでなく、イノベーションの滑走路とするために本質的に必要な条件なのである。

大阪・関西万博が本当の意味で「未来社会の実験場」となるよう、私も副会長として、日本科学未来館館長として、IBMフェローとして、そして1人の視覚障害者を持つ研究者として、様々な提案をしていきたいと思う。皆様もぜひ、この新たな形の実験場に参加することで未来の社会の姿を変える活動に参加いただきたい。